

研究業績一覧 - 人間福祉研究科 -

Kwansei Gakuin University Graduate School of Human Welfare Studies

ふりがな 氏 名	やすい ゆうこ	専 攻	人間福祉専攻
	安井 優子	指導教員	藤井 美和 教授
研究領域	Spiritually-Sensitive-Social Work、スピリチュアリティ、死生学		
研究題目	医療ソーシャルワーカーの Spiritual Sensitivity の検証 - Spiritually-Sensitive-Social Work の発展に向けて -		
所属学会	日本社会福祉学会・日本保健医療社会福祉学会・日本キリスト教社会福祉学会 日本臨床死生学会・日本生命倫理学会・日本ソーシャルワーク学会 日本ソーシャルワーカー協会・日本医療ソーシャルワーカー協会		
教 歴 担当授業科目	2020年4月 関西学院大学人間福祉学部春学期開講「ターミナルケア論」非常勤講師		

教育研究業績書

2022年 5月 26日

氏名 安井 優子 印

教育上の能力に関する事項	年 月 日	概 要
1 教育方法の実践例 特記事項なし		
2 作成した教科書, 教材 特記事項なし		
3 当該教員の教育上の能力に関する大学等の評価 特記事項なし		
4 実務家教員についての特記事項 関西学院大学人間福祉学部人間科学科で開講されている 「人間科学フィールドワーク入門」の授業でのゲストスピーカー	2015年 6月4日	「ホスピス・緩和ケア」というテーマで学部生対象に90分間講義を行わせて頂いた。内容としては、自分自身の緩和ケアナースとしての体験や、福祉的視点からのホスピス・緩和ケアの振り返り、また夫と死別後、本大学に入学し経験した精神保健福祉士の実習を通して気づいたこと等である。
関西学院大学人間福祉学部人間科学科で開講されている 藤井美和教授「死生学」の授業でのゲストスピーカー	2016年 5月26日	「緩和ケアナースとして/ 夫との死別経験を通して」というテーマで学部生対象に90分間講義を行わせて頂いた。内容としては、自分自身の緩和ケアナースとしての体験や夫との死別体験についてである。
関西学院大学人間福祉学部人間科学科で開講されている 藤井美和教授「死生学」の授業でのゲストスピーカー	2018 5月31日	「緩和ケアナースとして/ 夫との死別経験を通して」というテーマで学部生対象に90分間講義を行わせて頂いた。内容としては、自分自身の緩和ケアナースとしての体験や夫との死別体験についてである。
5 その他		
職務上の実績に関する事項	年 月 日	概 要
1 資格, 免許 正看護師免許 (登録番号817145号)	1994年 4月20日	1994年4月20日に免許を取得し、看護師として1994年4月～1998年6月まで国立大阪病院救命救急センター、1998年11月～2002年3月まで国家公務員共済組合連合会六甲病院の外科整形外科病棟・緩和ケア病棟、2002年4月～2005年2月までホームホスピス関本クリニック、2003年11月～2005年2月まで西宮市社会福祉事業団西宮市甲子園訪問看護センター (関本クリニックと兼務) 2005年4月～2006年6月まで宗教法人在日本南プレスビテリアンミッション淀川キリスト教病院ホスピス病棟等で勤務する。

介護支援専門員免許(登録番号0300610号)	2004年 4月23日	2004年4月23日に免許取得後、当時勤務していた西宮市社会福祉事業団西宮市甲子園訪問看護センターで、約1年間、看護師業務と介護支援専門員業務を兼務する。
精神保健福祉士免許(登録番号066876号)	2015年 3月13日	免許取得後、実践の場での実務経験はなし。
社会福祉士・精神保健福祉士実習演習担当教員講習会 ＜精神保健福祉士実習分野講習＞修了	2018年 8月28日	左記文部科学省・厚生労働省規定、一般社団法人日本ソーシャルワーク教育学校連盟主催の全4日間の講習会を修了する。
社会福祉士・精神保健福祉士実習演習担当教員講習会 ＜精神保健福祉士演習分野講習＞修了	2018年 9月6日	左記文部科学省・厚生労働省規定、一般社団法人日本ソーシャルワーク教育学校連盟主催の全4日間の講習会を修了する。
社会福祉士・精神保健福祉士実習演習担当教員講習会 ＜社会福祉士基礎分野講習＞修了	2019年 7月24日	左記文部科学省・厚生労働省規定、一般社団法人日本ソーシャルワーク教育学校連盟主催の1日講習会を修了する。
社会福祉士・精神保健福祉士実習演習担当教員講習会 ＜社会福祉士演習分野講習＞修了	2019年 8月9日	左記文部科学省・厚生労働省規定、一般社団法人日本ソーシャルワーク教育学校連盟主催の全4日間の講習会を修了する。
社会福祉士・精神保健福祉士実習演習担当教員講習会 ＜社会福祉士実習分野講習＞修了	2019年 8月29日	左記文部科学省・厚生労働省規定、一般社団法人日本ソーシャルワーク教育学校連盟主催の全4日間の講習会を修了する。
2 特許等 特記事項なし		
3 実務家教員についての特記事項 第25回日本死の臨床研究会での事例検討発表	2001年 11月17日	国家公務員共済組合連合会六甲病院緩和ケア病棟で看護師として勤務していた時に、左記学会において、「T氏夫妻は何を求めているのか？」というテーマで、自身がプライマリナーナース(以下PNs)として担当していたT氏の事例検討発表を行った。T氏は40代前半、胃癌の女性で、入院当初から怒りを表し、主治医とPNs以外の他の医療者とのかわりを拒否・制限された。事例検討により、改めて事例の問題点の整理を行い、最後に総合討論として、終末期患者の心理的变化の特徴や怒り、医療スタッフのかわりについて検討した。
第11回日本緩和医療学会総会での共同研究のポスター発表	2006年 6月23日	宗教法人在日本南プレスビテリアンミッション淀川キリスト教病院ホスピス病棟で看護師として勤務していた時に、左記学会において、共同研究者の前滝栄子、穂田朋子、田村恵子、坂口幸弘と共に、「終末期がん患者の家族の身体的・心理社会的状況に関する研究－死別後初期段階における看護師の評価と遺族の自己評価の比較検討－」というテーマでポスター発表を行った。2005年7月～9月に淀川キリスト教病院ホスピス病棟で亡くなった患者の遺族及び病棟看護師を対象に、死別後初期段階における身体的・心理社会的状況についての質問紙調査を実施した。遺族と看護師の評価を比較検討した結果、「感情状態」「性格傾向・信念」のカテゴリーで不一致が多く、また、患者の在院日数が長い症例ほど不一致数が少なくなる傾向が明らかとなった。
4 その他 特記事項なし		

著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書) 特記事項なし				
(学術論文) 1. 「東日本大震災による死別体験者が苦しみの中で求めるもの」	単著	2017年3月	関西学院大学大学院人間福祉研究科博士課程前期課程修士(人間福祉) 学位論文	本論文の目的は、東日本大震災・津波で愛する人を喪った人が、その苦しみを抱えながら生きてきた5年間のプロセスの中で求めてきたものは何かを明らかにすることである。臨床宗教師による活動「カフェ・デ・モンク」に参加したことがある家族を喪った被災者2名へのインタビュー調査、フィールドノーツをデータとし、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによる分析を実施した。その結果、被災者が求めてきたものは「苦しみに対し自分なりに意味を見出すこと」であり、それには【人との温かい交流】【宗教性の提示への希求】【自己と向き合うこと】が鍵となること、またその苦しみとはスピリチュアルペインであることが明らかとなった。臨床宗教師の活動は、宗教者としてと同時にスピリチュアルペインに配慮した関わりであり、今後は限界状況にある人へのソーシャルワークにおいても「スピリチュアリティに配慮したソーシャルワーク」が必要であると提言した。頁数は173頁(添付資料も含めると計233頁)。
2. 「東日本大震災による死別体験者が苦しみの中で求めるもの—スピリチュアリティの視点からの考察—」	単著	2018年11月	日本社会福祉学会『社会福祉学』第59巻第3号 pp. 55-67 (査読あり)	修士(人間福祉) 学位論文の投稿論文(査読あり)である。本論文の目的は、東日本大震災・津波で愛する人を喪った人が、その苦しみを抱えながら生きてきた5年間のプロセスの中で求めてきたものは何かを明らかにすることである。臨床宗教師による活動「カフェ・デ・モンク」に参加したことがある家族を喪った被災者2名へのインタビュー調査、フィールドノーツをデータとし、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによる分析を実施した。その結果、被災者が求めてきたものは「苦しみに対し自分なりに意味を見出すこと」であり、それには【人との温かい交流】【宗教性の提示への希求】【自己と向き合うこと】が鍵となること、またその苦しみとはスピリチュアルペインであることが明らかとなった。臨床宗教師の活動は、宗教者としてと同時にスピリチュアルペインに配慮した関わりであり、今後は限界状況にある人へのソーシャルワークにおいても「スピリチュアリティに配慮したソーシャルワーク」が必要であると提言した。
3. 「『聴く』ことの再考—ソーシャルワークにおける今日的意味—東日本大震災による死別体験者の苦しみの研究を通して—」	単著	2019年3月	日本医療社会福祉学会『医療社会福祉研究』第27巻 pp. 17-28	左記は日本医療社会福祉学会第28回大会のシンポジウム「『聴く』ことの再考—ソーシャルワークにおける今日的意味—」において、シンポジストの1人として個人発表を行った内容を文章化したものである。その内容としては、初めに自分自身の原体験、ソーシャルワークとの出逢いを述べた後、修士時代の東日本大震災による死別体験者の苦しみの研究をもとに、「傾聴について」「私にとって『聴く』こととは」「スピリチュアリティに配慮したソーシャルワーク (Spiritually-Sensitive Social Work) とは」「限界状況にある人に寄り添うソーシャルワーカーに必要なこと」等の観点から、自己の見解を論じている。また、p47-50には、自分も含めたシンポジスト3人(川口真理子、林真帆)で行った全体討論(ディスカッション)の内容も掲載されている。

4. 「ソーシャルワークにおけるSpiritually-Sensitiveとは何か」	単著	2020年1月	日本キリスト教社会福祉学会『キリスト教社会福祉学』第52号 pp. 46-57 (査読あり 研究ノート)	本論文の目的は、文献研究からソーシャルワークにおけるSpiritually-Sensitiveとは何かを明らかにすることである。文献研究の結果、ソーシャルワークにおけるSpiritually-Sensitiveとは、ソーシャルワーカーが全人としての自己のスピリチュアリティを自覚し、「超越への扉」を閉ざさずにいること、またそれにより全体的環境の中にある全人として人間存在を捉える視点を有し、クライアントのスピリチュアリティにもSensitiveに、その人間理解が開かれている態度であると言えると示唆される。
5. 「緩和ケア・終末期医療における医療ソーシャルワーカーのSpiritual Sensitivityの構造－エキスパートインタビューに基づいて－」	単著	2021年3月	一般社団法人日本保健医療社会福祉学会『保健医療社会福祉研究』第29巻 pp. 29-45 (査読あり)	本論文の目的は、緩和ケア・終末期医療における医療ソーシャルワーカー(以下MSW)のSpiritual Sensitivityの構造を明らかにすることである。エキスパートMSW4名を対象に実施したインタビュー内容をKJ法により構造化した。その結果、宗教の有無には拘らず、原体験に根ざしたいのちに対する価値観と人間と超えるもの・世界との内なる対話を源流とした【全人理解に基づく「人間の限界自覚」と「人間を超えるものへの信頼的態度」】を核に、クライアントもMSWも同じ全人として互いのスピリチュアリティ響き合わせながら苦しみの意味を共に指向する態度や、自らも1人の全人として自己存在の根源的意味を指向する態度と相互に影響し合う構造であることが明らかとなった。
(学会発表) 1. 「東日本大震災による死別体験者が苦しみの中で求めるもの」	口頭発表	2017年10月	日本社会福祉学会第65回秋季大会(首都大学東京)	左記学会で、修士学位論文の学会発表(口頭での個人発表)を行う。発表内容については、(学術論文)の欄で前述した概要と同様、次の通りである。本論文の目的は、東日本大震災・津波で愛する人を喪った人が、その苦しみを抱えながら生きてきた5年間のプロセスの中で求めてきたものは何かを明らかにすることである。臨床宗教師による活動「カフェ・デ・モンク」に参加したことがある家族を喪った被災者2名へのインタビュー調査、フィールドノーツをデータとし、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによる分析を実施した。その結果、被災者が求めてきたものは「苦しみに対し自分なりに意味を見出すこと」であり、それには【人との温かい交流】【宗教性の提示への希求】【自己と向き合うこと】が鍵となること、またその苦しみとはスピリチュアルペインであることが明らかとなった。臨床宗教師の活動は、宗教者としてと同時にスピリチュアルペインに配慮した関わりであり、今後は限界状況にある人へのソーシャルワークにおいても「スピリチュアリティに配慮したソーシャルワーク」が必要であると提言した。
2. 「スピリチュアリティに配慮したソーシャルワーク(Spiritually-Sensitive-Social Work)とは何か」	口頭発表	2018年10月	第24回日本臨床死生学会年次大会(千葉県立保健医療大学)	左記学会で、博士論文の第一段階である文献研究の内容に関する学会発表(口頭での個人発表)を行った。本研究の目的はスピリチュアリティに配慮したソーシャルワーク(Spiritually-Sensitive-Social Work 以下SSSW)とは何かを明らかにすることである。これから調査研究を進めるにあたり、SSSWについてまず明確に定義づけることで、調査者と調査協力者との間で統一した概念定義の共有を可能とすることをその意義とする。研究方法としてはカンダのSSSWの定義をふまえた上で、(1)全体的人間・スピリチュアリティとは何か、(2)全体的環境とは何か、(3)ソーシャルワークとは何か、の3つの観点から文献研究を行った。そしてその結果、現時点においてSSSWとは何かについて考察されること、またソーシャルワークとSSSWの違いと考えられるポイントについて報告した。

<p>3. 「『聴く』ことの再考ーソーシャルワークにおける今日の意味ー東日本大震災による死別体験者の苦しみの研究を通してー」</p>	<p>口頭発表</p>	<p>2018年9月</p>	<p>日本医療社会福祉学会第28回大会シンポジウム</p>	<p>左記学会のシンポジウムにおいて、川口真理子、林真帆と共に、シンポジストの1人として、個人発表と全体討議（ディスカッション）を行う。発表内容としては、次の通りである。初めに自分自身の原体験、ソーシャルワークとの出逢いを述べた後、修士時代の東日本大震災による死別体験者の苦しみの研究をもとに、「傾聴について」「私にとって『聴く』こととは」「スピリチュアリティに配慮したソーシャルワーク（Spiritually-Sensitive-Social Work）とは」「限界状況にある人に寄り添うソーシャルワーカーに必要なこと」等の観点から、自己の見解を報告した。またシンポジウム後半は、他のシンポジストと共に全体討議を行った。</p>
<p>4. 「緩和ケア・終末期医療における医療ソーシャルワーカーのSpiritual Sensitivityの構造ーエキスパートインタビューに基づいてー」</p>	<p>口頭発表 (オンライン開催)</p>	<p>2021年2月</p>	<p>関西社会福祉学会・日本社会福祉学会関西地域ブロック</p>	<p>左記学会で、博士論文の第2段階である質的調査研究の内容に関する学会発表（オンラインでの口頭による個人発表）を行った。本論文の目的は、緩和ケア・終末期医療における医療ソーシャルワーカー(以下MSW)のSpiritual Sensitivityの構造を明らかにすることである。エキスパートMSW4名を対象に実施したインタビュー内容をKJ法により構造化した。その結果、宗教の有無には拠らず、原体験に根ざしたいのちに対する価値観と人間を超えるもの・世界との内なる対話を源流とした【全人理解に基づく「人間の限界自覚」と「人間を超えるものへの信賴的態度」】を核に、クライアントもMSWも同じ全人として互いのスピリチュアリティ響き合わせながら苦しみの意味を共に指向する態度や、自らも1人の全人として自己存在の根源的意味を指向する態度と相互に影響し合う構造であることが明らかとなった。</p>